

## 臺北高校的 高砂舞與臺高舞

高砂舞，1930年



認識臺北高校的朋友也許都知道，校園裡有一套深具特色的「臺高舞」（原文臺高踊，日文「踊」就是舞），是富有原住民「風味」、但不是原住民「原味」的舞蹈，在學期間大家幾乎都能跳上一段，並作為臺北高校「名物」的一種特產。嚴格來說，臺北高校其實有兩套舞蹈，「臺高舞」是從更早之前的「高砂舞」（原文高砂踊）演化而來的。「高砂舞」是由臺北高校體操科教師船曳實雄、音樂科教師村橋靖彥，與數名學生於假期間深入泰雅族部落，觀察其生活種種，經酋長傳授舞蹈要點，而後由船曳實雄新創為「高砂舞」（又名生蕃踊）。「高砂舞」比起日後的「臺高舞」，相對接近原住民一些，除舞蹈本身，還搭配兩首泰雅族歌曲「蠻歌」，加上日語的「第一校歌」、「第二校歌」，間以「御大典の曲」伴奏而成，故應該說，「高砂舞」雖更有原住民味道，音樂則是「日臺融合」的。那麼，為什麼船曳實雄需要特地新創一套校園舞蹈，且根源原住民舞，而不是其他舞蹈呢？

船曳實雄在〈高砂舞りの由來〉回憶，當時臺北高校是一所新設的學校，校長三澤糾因此覺得需要統一學生氣質，「統一學生氣質」的這個想法，也是形塑校風與校園文化之所由。船曳實雄經常趁學期間的休假四處登臺灣高山，登山時經常拜訪原住民部落，在部落和頭目說話，和兒童遊戲，接觸原住民生活，他認為舞和歌，是原住民純真快樂生活的支柱。一次登合歡山時，參加了泰雅族五百人以上的集會與舞蹈，這個舞蹈極為悠長，全體如波浪一樣流動，在夜間營火照耀下極為莊嚴，深受感動的他在心裡一步一步地跳著，成為「高砂舞」誕生之契機。於新創「高砂舞」時，船曳實雄完全不考慮近代式舞蹈，一方面高校生還是有課業上的壓力（當時校長鼓勵學生以東大、京大等一流大學為第一志願），學校也都是男性，且為了滿足高校生的「奇樣子」（きもち），無論如何都必須是自由奔放的這點來考慮。「高砂舞」最初就以「生蕃踊」之名，於1928年校慶運動大會上由尋常科學生演



臺高舞，1930年



出，高等科刊物《翔風》第七號記載，「尋常科生的生蕃踊，是勇壯的原始性舞蹈之華麗表現」。

於「高砂舞」基礎上，代表臺北高校的「臺高舞」在隔年（1929）就被創造出來，相對於「高砂舞」較接近原住民，且偏向尋常科生來跳，「臺高舞」的日本味更加濃厚，並成為全校性舞蹈。當時高等科學生萌生想要創造運動會特色的想法，和英文教師小山捨月討論後，由小山教師填寫歌詞，音樂教師村橋靖彥作曲，此即〈台高踊り歌〉由來，而編舞由另一名體操教師鴻澤吾老，及村橋靖彥、船曳實雄協力完成。雖然「臺高舞」一部份承襲自「高砂舞」，也許因為鴻澤吾老與原住民關係較淺，使得「臺高舞」更為接近日本舞。日本在每年盂蘭盆節時，地方居民集體舞蹈「盆踊」，和「臺高舞」在直觀上頗為相似，也就是身體中心不時偏向左或右行進，而且手部動作（手踊）豐富，「盆踊」也是日人引入的日本文化，主要流行於日本人間。不過比起「盆踊」，「臺高

舞」更有自由奔放和「狂歡」的味道，1929年校慶運動會當日，由全校學生共舞「臺高舞」，成為此後校慶運動會和寮歌祭特色之一。「臺高舞」成為校園「名物」後沒有停止演化，如今所保留「臺高舞」舞譜至少是1933年以後的跳法，已不同於1929年最初的版本，戰後每年全日本「寮歌祭」，臺高畢業生穿著象徵臺灣原住民的衣飾，繼續演出「臺高舞」，而舞步似乎更為精簡，例如舞譜當中的「一拍手」，已不存在他們的舞步中。

高砂舞和臺高舞不僅是全日本高校唯一，於同期臺灣社會文化亦別具意義，當時社會主流舞蹈有爵士舞、日本盆踊、唱片公司編寫的跳舞音樂、兒童劇團的兒童舞、甚至健身目的的收音機體操，但沒有任何一隻源自原住民舞，高砂舞和臺高舞即使經過改編，或夾雜日本舞，確實已不同於社會主流，凸顯臺高的與眾不同。

中央研究院臺灣史研究所博士後研究學者  
徐聖凱

## 台北高校の 高砂踊りと台高踊り



1942 年の台高踊り

台北高校を知る人なら、台北高校に深い意義と特色を与える「台高踊り」というものがあつたことを知っているだろう。これは原住民の「特色」に富んだ踊りではあるが、原住民の「本来の特色」を備えた踊りではない。在学期間中ほとんどの生徒が踊ることができた、台北高校の一種の「名物」のようなものだった。厳密に言えば、実際には、台北高校には二種類の踊りがある。「台高踊り」は、先にできた「高砂踊り」が変化したものである。「高砂踊り」は、台北高校の体操科教師である船曳実雄、音楽科教師である村橋靖彦によって創作されたものである。数名の生徒たちと休暇期間中にタイヤル族の部落に行き、生活の様子などを観察し、酋長を通じ踊りの要点を伝授され、後に船曳実雄によって再度新しく作られたものが「高砂踊り」（別名

生蕃踊り）である。「高砂踊り」は後に作られた「台高踊り」に比べると、比較的原住民の要素が濃い。踊りそのものの他に、タイヤル族の楽曲である「蛮歌」を二曲、更に日本語の「第一校歌」、「第二校歌」を加え、「御大典の曲」の伴奏も組み合わされている。したがって、「高砂踊り」は原住民の趣や特色はあるが、曲調は「日台融合」であると言える。では、なぜ船曳実雄は他の踊りではなく、わざわざ原住民に根差した学校舞踊を作ったのだろうか。

船曳実雄は「高砂踊りの由来」で、当時台北高校が新設校であつたがゆえに、校長三澤糾が学生たちの気持ちを統一する必要があると考えた。気持ちを一つにすることは、校風と学校文化を作るためだったのだろう。船曳実雄は学校の休暇を利用し、頻繁にあちこちの台湾の山を登った。

また、登山のたびに原住民の部落を訪問し、酋長と語り合ったり、子供たちと遊んだり、原住民たちの生活に触れた。そして踊りや歌が原住民にとって純真且つ朗らかな生活の支えになっているのだと感じた。一度、合歡山に登った時に、五百人以上のタイヤル族が集まる集会で、その踊りに加わったことがあった。この踊りは極めて悠長で、全身が波のように動き、また夜の焚き火の中で荘厳な感じを船曳に与えた。原住民が彼らの心の中にあるものを、静かに

一步一步踊りつつ表現する姿に打たれた。この経験が「高砂踊り」が誕生するきっかけとなった。「高砂踊り」を創作した時、船曳実雄は近代的な踊りについては全く考えていなかった。一方で、生徒たちには学業面でのプレッシャーがあり(当時の校長は東大や京大などの一流大学を第一志望にすることを生徒たちに推奨していた)、男ばかりの環境で、高校生の気持ちを満足させる為には、どうしても自由奔放でなければならないと考えた。「高砂踊り」は最初



1933 年の台高踊り



1938年の台高踊り

「生蕃踊り」と呼ばれ、1928年に行われた創立記念日の大運動会で尋常科の学生たちによって披露された。高等科の刊行物である『翔風』第7号に「当日の偉観であった尋常科の生蕃踊り。勇壮なる原始的舞踊の華かなる表現」と記録されている。

台北高校を代表する「台高踊り」は「高砂踊り」をもとに翌年(1929)に作られた。「高砂踊り」が原住民の舞踏の要素が濃く、尋常科生によく踊られたのに対し、「台高踊り」の方は日本風の要素がもより強く、全生徒が踊る踊りとなった。当時高等科の学生たちは、運動会に何か特色を作らなければならないと考えた。英語教師である小山捨月に相談した結果、小山によって歌詞が書かれ、音楽教師の村橋靖彦によって作曲された。これが「台高踊り歌」の由来で

あり、また、振り付けはもう一人の体操科教師である鴻澤吾老と村橋靖彦、船曳実雄が協力し完成させた。「台高踊り」は部分的に「高砂踊り」を踏襲しているが、鴻澤吾老と原住民の関係は浅かったために、日本寄りのものになったのかもしれない。日本では毎年お盆の時期になると、人が集まり踊る「盆踊り」というものがあり、「台高踊り」はこれと大変よく似ている。体の中心がたびたび左右に動きながら進み、手の動作もさまざまな「盆踊り」は、日本人により広まった日本文化で、主に日本人の間で流行した。しかし、「盆踊り」と比べれば、「台高踊り」はより自由奔放な「お祭り騒ぎ」の趣がある。1929年に行われた創立記念の運動会当日は、全校生徒によって「台高踊り」が披露され、後に創立記念の運動会と寮歌祭の特色の一つとなっ



1942年の台高踊り

た。「台高踊り」は学校の「名物」になってからも止まることなく進化し、今のところ残されている「台高踊り」の図解にある振りは少なくとも1933年以降のもので、1929年当初のものとは違う。戦後、毎年日本で「寮歌祭」が行われているが、台北高校の卒業生たちは台湾の原住民をイメージする衣装を身に纏い、「台高踊り」を披露し続けている。振りはよりシンプル化されて、例えば踊りの図解中にある「一拍手」はすでになくなってしまっている。

高砂踊りと台高踊りは日本全国の高校で唯一のものであるだけでなく、同時期の台湾社会や文化にとっても別の意義を

もっていた。当時、世間で主流になっていた踊りはジャズダンス、日本の盆踊り、レコード会社が作ったダンスミュージック、児童劇団の児童によるダンス、また健康目的のラジオ体操があったが、何一つとして原住民の踊りをもとにしたものはなかった。高砂踊りと台高踊りが改作されていて、日本の踊りが入り混じっていても、確かにそれは世間の主流とは異なり、台北高校の独自性を引き立たせているのである。（木立翼 訳/津田勤子 校訂）

中央研究院台湾史研究所博士研究員  
徐聖凱